

用語集超活用ソフト スーパーエイチティースリー **SuperHT³** で実現する 用語/訳語の統一

せっかく作ったその用語集、どうやって使いますか？

Standardization of terminology for technical
communication and translation using **SuperHT³**

有限会社 アトリエ・ワン

貝島良太

Ryota Kajima

「かにの原理」の構造をもつ用語集を、テクニカルライティングや翻訳などに活用するために開発された用語集超活用ソフト **SuperHT³** (スーパーエイチティースリー)。このソフトの主なキーワードは、標準表記と異表記、用語確認と用語統一、2か国語対応のリバーシブル訳語付与、翻訳支援、解説表示、飛び込んでくる辞書などである。1996年に開発開始したHT³ (エイチティースリー) を2001年に大改良し、より早くて便利で安価なものにすることができた。製品名を **SuperHT³** に改名。通常ほとんど使われていない電子用語集を、真に活用するためのツールソフトの誕生である。

1. はじめに

用語統一はテクニカルライティングや翻訳をするうえで、非常に重要なテーマである。書き手はそれらに配慮してはいてもつい気を抜いてしまい、断りなく同じことがらを別の表現で書いてしまうことがよくある。別の表現のほうも常識的なもの、例えば「フロッピーディスク」という語を使って書き進んできたのに突然「フロッピを…」などと書かれていると、文意は読み手に伝わるものの、文書そのものに対する信頼性が何か失せてしまう。まして、教科書やマニュアルのような文書(即ち、読み手が内容を理解するために一語一語かみしめながら読んでいくようなもの)で突然別の表現で書かれていたら、読み手は別の意味を考えてしまう。カタカナ語と和語(例:「テスト」、「試験」と「検査」)、送り仮名の有無(例:「申し込み」、「申込み」と「申込」)、正式名称と省略形(例:「フロッピーディスク」、「フロッピー」と「FD」)、漢数字とアラビア数字(例:「一次コイル」と「1次コイ

ル」)、ギリシャ文字とカタカナ(例:「線」と「ガマ線」)などの不注意な混在である。

例えば、「X線を照射し…」という文章のあとで「このエックス線量を…」が出てくると、読み手は少なからず???となるはずである。このように同じことがらを意味もなく別の表現で書くことは、読み手を困らせるだけでなく、書き手に対する負の評価にもつながることになるので、絶対に避けるべきである。

しかし、云うは易し行うは難しである。少なくとも、どの言い回しに統一するのかを決めておかななくては、どちらの表現が間違っているかの判断すらつかない。それを決めるのが用語集である。用語集は知識を伝えるだけでなく、使用する用語を規定する規則書でもあることを再認識すべきである。

2. 用語集に求められること

用語集は用語統一のための規則書(=バイブル)である。しかし、間違いのある用語集をバイブルにしたのでは用語統一後の文書は誤解を生じやす

いものになってしまう。せっかく作るなら良い用語集を作らなくては、それまで用語集にかけた苦労が水泡に帰してしまう。

まず、良い用語集とはどんなものか考えてみよう。有償無償を問わず他人が作ったものであれ、あるいは自作したものであれ、用語を羅列したものはすべて用語集であるが、用語集の良し悪しはどこで決まるのだろうか。用語集に求められる値打ちは大きく分けて次の5点があると筆者は思う。

- 正確さ
- 網羅性
- バランス感覚
- 権威付け
- 保守性

2.1 正確さ

用語集は何よりも正確なものでなくてはならない。特に、解説をつける場合、その用語集で使用されている用語が解説文の中で使用されているものでなくてはならない。英語のスペルミスや日本語のワープロの変換ミスなどももちろんあってはならない。(結構著名な用語集でもこれらのミスが結構多い。他人ごとではない)

2.2 網羅性

用語集には当然、何に関する用語集か、タイトルが付けられる。内容はそのタイトルにふさわしいものでなくてはならない。例えば、自動車用語集というにもかかわらず、ブレーキに関する用語がほとんど取り込まれていなかったら、網羅が不十分なのでユーザーの期待を裏切ることになる。例え間違いが含まれていなくとも、そのようなものは良い用語集とは言えない。

2.3 バランス感覚

バランス感覚には深度のバランスと表記のバランスがある。深度のバランスというのは、用語集のタイトルからユーザーが期待する語彙の大分類の網羅性はあるが、中分類、小分類の語彙、即ち深度のバランスに偏りが無いかどうかということである。例えば、身体の部位の用語を集めた用語集に、脳のことはほとんど触れていないにもかかわらず、心臓のことは詳細な用語が記述されていたり、「右

心房、右心室、左心房」があっても「左心室」が抜けているような場合がこれにあたる。これはユーザーの期待感を裏切ることになる。語彙を集める場合はできるだけ教科書的なものから拾い出して作るのが良い。

表記法もその用語集を通してバランス感覚を持ち、一貫したものでなくてはならない。例えば、「input」を「入力」とした場合、「output」を「アウトプット」とするようなことは避けるべきである。和語なら和語に、カタカナ語ならカタカナ語に表記の統一もすべきである。

2.4 権威付け

同じような内容であっても、誰がいつ作成した用語集なのかはユーザーにとって重要なことである。また、翻訳者にとって、顧客から支給された用語集は絶対的なものになる。一般的には、良い用語集の条件として、権威ある団体、会社、専門家がより最近に出したものが好まれる。中身は同じであっても、無名の人が作ったものは軽んじられる傾向が強い。

2.5 保守性

用語集の良し悪しについて論ずるとき、保守性までは通常含めないが、電子用語集については特に保守性は重要である。なぜなら、決して完璧な用語集は作れないので、常に改良のため、追加、修正、削除などが必要になるからである。通常のEP-WINGの用語集では、ユーザーは個人的な保守は行えなえず、ただ利用するだけである。しかしそれがExcelで構築されたものであれば、自由に保守できることになる。保守には、後段で説明する異表記の追加やユーザー辞書との優先順位をつけた統合も含まれる。

3. 一般的な電子用語集活用上の問題点

3.1 空振り検索

通常、電子用語集を入手した場合、紙の用語集と同様、ユーザーは用語を引かなくては使えない。ある用語を電子用語集で引く(検索する)とき、その用語集に収録されていない用語、即ち登録されていない文字列のときは、無反応(無視)であったり、「その語は登録されていません」あるいは「他

の語で検索してください」などのメッセージが表示される。結局は探している用語に出会えないのである。筆者はこれを「空振り検索」と呼び、浪費時間だと考えている。専門用語になればなるほど、また、検索する文字列が長くなればなるほど空振り検索の傾向は強くなる。

3.2 空振り検索の原因

空振り検索の原因は一言で言うと、用語集に収録されている見出し語と検索文字列との不一致である。即ち、収録語彙自体が少ない場合と、用語集にない表記即ち異表記による検索が主なものである。異表記に関しては上記1項と2.3項の表記法で触れた問題である。筆者はこれを「標準表記と異表記の問題」と呼んでいる。この場合、用語集の見出し語になっているものを標準表記と呼び、同義語および異表記（異表記について筆者は敢えて「言葉遊び」と呼ぶ）をまとめて異表記と呼ぶことにする。通常用語集において同義語はある程度記載するが、言葉遊びの部分は記載しない。そのため電子用語集を引いても、求める用語に出会えないことが多いのである。特に日本語の場合、用語集に収録されている見出し語の文字列（用語）が正確に文書上に表現されていないことが多く、せっかく準備した用語集を活かせないことが多い。結局はこれらを完全に取り除くことはできないので、電子用語集を引くかぎり空振り検索は覚悟せざるを得ないことになる。

3.3 完全活用は無理なのか？

用語集を利用すると普通はその用語集を活用した気分になるかも知れないが、筆者はそうは思わない。なぜなら、利用と活用は違うからである。活用というのは使い切ることであり、通常の電子用語集の利用では、まず不可能なことである。例えば、100ページの翻訳の仕事で、顧客から5,000語の対訳用語集を支給されたとしよう。全ての訳語を当該用語集で100%確認することは、コスト面からみて通常は不可能である。このような状況下で翻訳者は、ふつう自分の知らない用語についてだけ用語集に頼って翻訳することになる。自分の知っている用語が全てその用語集に収録されてい

る訳語と同一ならば問題ないが、異なっていたときは大いに問題になる（往々にしてこのようなことはよくある）。また、翻訳された文書を見て用語集の訳語が全て使われているかの検収も、結局は拾い読み程度にならざるを得ないのが現実である。これらは、「辞書は引くもの」という規定概念に縛られている限り甘受せざるを得ない。

4. 飛び込んでくる用語集の誕生

「用語集を引く」という行為をする限り空振り検索のリスクがあるし、全部引くということもできないことは上述のとおりである。そのような必要性から生み出されたものが、「引かなくて良い用語集」「飛び込んでくる用語集」の考え（日米特許取得）である。用語集に登録されている用語のほうから文書中に飛び込んできて何かマーキング（該当する文字列に色や下線を付けたり訳語付与をすること）ができれば、反対に、マークされていない言葉は当該用語集にはないのであるから、その用語集を引かなくてよいのである。ちょうど一等か末等かは別にして、当たりの宝くじだけを買うことができるようなものである。このような機能を持ったソフトで動作する**SuperHT³**対応の用語集だからこそ、用語集を文字どおり100%活用できるのである。また、活用と言うからには、活用したかどうかのチェックもできなくてはならない。更に、例えば、日英翻訳用に作った用語集には当然日本語と英語が対訳で登録されているわけであるから、英日翻訳でも使いたいし、ついでに日本語だけ、英語だけの用語チェックでも使いたいというのが人情であろう。しかし、通常の機械翻訳の用語集やEP-WINGの電子辞書は、リバーシブル構造になっておらず、逆の使用はできない。用途外の使用には似て非なる用語集を別途準備しなくてはならない。従来はこれらの不都合は、止むを得ないものとしてあきらめられてきた。**SuperHT³**はこれらの問題点を一挙に解決したのである。

4 SuperHT³の概略

以下に本ソフトの概略を説明する。

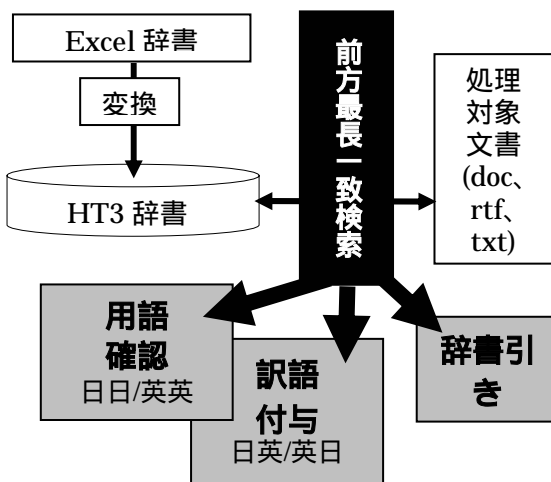
4.1 作業フロー

最初に用語集を準備しよう。まず、用語集（辞書）

を「かきの原理」の**SuperHT³**形式で書かれたExcel辞書として作成し、**SuperHT³**の辞書データベースであるHT3辞書に変換する。

Word文書(拡張子doc)、リッチテキストファイル(rtf)またはテキスト(txt)形式の文書を**SuperHT³**作業画面に呼び込んで、このHT3辞書に用語として登録されている文字列と前方最長一致方式で検索し、用語確認、訳語付与など目的に応じた処理を行うというのが作業フローの概略である。

次の図は作業フローを示したものである。



4.3 用語確認機能

用語集に見出し語として登録されている用語（文字列）と一致した文書中の文字列に、色と下線を付けて、他と区別する機能である。これを「色分け」と呼ぶ。用語確認は、対訳形式の二か国語で作った「かきの原理の用語集」（例えば日本語と英語で書かれたそれぞれの言語に標準表記と複数の異表記を登録できる形式の対訳用語集）の日本語だけあるいは英語だけを使い、日本語文書あるいは英語文書に対して前方最長一致の検索をかけるもので、一致（ヒット）した用語（文字列）が当該用語集の標準表記欄に登録されていたものか、異表記欄に登録されていたものかも、付与される色により識別できるようになっている。因みに、標準表記の文字列には水色、異表記の文字列にはピンク色で色分けされるので、ヒット結果を一覧するだけで、その文書中の標準表記と異表記が一目瞭然である。ピンク色になっている文字列は異表記すなわち当該用語に対する標準表記があるとい

うことである。その場合、用語統一ボタンをクリックすることにより標準表記に一発置換することができる。この色分け機能を利用することにより、飛び込んでくる辞書として空振りなしの辞書引きが楽しめる。色が付いたということは、その用語が用語集に存在するという事だから、知りたい用語に色と下線が付いていれば空振りなしの辞書引きができることになる。逆に何もマーキングされていない文字列は当該用語集には登録されていないので、引くだけ無駄であるということである。空振り検索がなくなったといわれる所以である。さらに、この機能にはヒット語の一覧表示がついている。個々の用語が文書中で何回使用されていたか、実際の使用場所はどこかなどが一覧できるので文書管理上大変便利である。Excel辞書に構築した解説内容を参照する解説表示も画像表示など多彩な表現能力がある。

4.4 訳語付与と翻訳支援機能

2か国語リバーシブルの訳語付与ができ、付与された訳語を翻訳文書(MS-Word)にボタンひとつで取り込める機能である。この他にも、付与された訳語の一覧表示や解説表示も利用価値の高い機能だ。従来は翻訳の際に使用する用語集は、例えそれが電子化されているものであっても、空振り覚悟で引いたり、それが面倒なために訳語を知っている場合はあえて用語集を引かないで済ませたりしていた。得てしてそういうときに、指定訳語を使わなかったことが顧客から指摘されるもので、実にこれは翻訳者泣かせの問題である。指定された用語集を忠実に使用するというのは機械翻訳も行うが、残念ながら機械翻訳の翻訳の質はそのままプロの翻訳者の作品としては、ごく限られた使用方法（同じ文章の繰り返し翻訳など）以外、現状では受け入れがたい。用語集を残らず引いて翻訳者に教え、付与された訳語を使用するかどうかは翻訳者の裁量で決めることができるのが、現実には最も翻訳関係者から求められている機能だと筆者は思うのである。**SuperHT³**の訳語付与機能と翻訳支援機能により、知らないで指定訳語以外を使って問題になることが防止できるようになる。また、

翻訳後の文章に対して、4.3項の用語確認をすることにより、指定訳語がどれだけ使われているかのチェックもできる。翻訳の品質管理者には便利な機能である。

4.5 辞書引き機能

SuperHT³の辞書管理画面で前方一致の辞書引きができる。ワイルドカードを利用したり、逆引きは検索はできないものの、ブラウザにはMS-Internet Explorerを利用しているので、解説の画像表示(写真、図、表、式など)や上付き、下付き、ボールド、イタリックの4属性を持った文字の表示、HTMLのタグ情報を利用したさまざまな表現が可能である。

4.6 辞書統合機能

ユーザーは通常、複数の用語集を串刺しで利用したいはずである。**SuperHT³**はこの要求にも応えている。**SuperHT³**で一度に使用できるHT3辞書はひとつであるが、そのひとつというのは、**SuperHT³**形式で作られた複数のHT3辞書を、優先順位の高いものを上にして、幾つでも統合してつくるのできるのである。例えば、ある翻訳作業をするために、A、B、C、Dの4分野のHT3辞書を、C、D、A、Bの順に優先順位をつけて使用したいと仮定しよう。この場合、Xという用語がA、B、Cの3辞書に登録されているとすると、最初にCにあるもの、次にAにあるもの、最後にBにあるものの順で訳語を表示することができるのである。統合後のHT3辞書のサイズは辞書をおくハードディスクの容量に制限を受けるだけで、ソフト上の制限はない。ただしあまり多くの用語集を統合してしまうとHT3辞書DBのサイズが巨大化し、検索速度が相対的に落ちると、同一用語が他分野でも出現(用語の重複)することが多くなってしまい、用語選択に手間取ることになるのであまり得策とはいえない。通常、HT3辞書は小分野ごとにまとめたものを多種類準備しておき、作業ごとに最適な組み合わせの統合を行い、作業が終了したら、統合した辞書のファイル名だけを記録しておき、元のばらばらな辞書の状態に戻しておくのが実践的である。

5. 終わりに

用語集超活用ソフト**SuperHT³**はその名の示すごとく用語集を活用するためのツールソフトである。さまざまな機能が内蔵されているが、用語集を真剣に作ってそれが実際の文章の上で色分けがされたり、訳語付与がされたり、解説表示がされたときの感動を是非一度体験していただきたい。使えない用語集を作ったり収集するよりも、**SuperHT³**用語集に編集しなおして、**SuperHT³**で用語確認や用語統一、あるいは訳語付与や飛び込んでくる辞書で活用することで、はじめて用語集を作ったことが報われるのである。多くの専門家をご自分の用語集を**SuperHT³**形式で作りと、WEB上で交換できる場を作れば、マニュアルの執筆や翻訳などで基準となる用語を使った文書作りが可能になることを願ってやまない。

* * *

[本論文の執筆にあたっては、約200語の日本語用語集を自作し、表記の統一を図った]

参考文献

澤田 位 1997 JIS 工業用語大辞典 CD-ROM 版の開発について TC シンポジウム'97 論文集、146-149 ページ

富井玲子 1998 引く辞書から飛び込んでくる辞書へ 「用語集超活用ソフトHT³(Iフイーリ-)対応の辞書づくり」 TCシンポジウム'98論文集、83-87 ページ

貝島良太 1999 専門用語集の編集と活用 用語集超活用ソフトHT³(Iフイーリ-)の利用効果 専門用語研究 No.17 1999-02 31-37 ページ

用語集超活用ソフト**SuperHT³**のお問合せ先：
有限会社アトリエ・ワン (Atelier Bow-Wow)
SuperHT³事業室 貝島良太

e-mail: roy_kajjima@h8.dion.ne.jp

URL: <http://www.hbi.co.jp/ht3/top.html>

Tel/Fax: 03-3351-0058